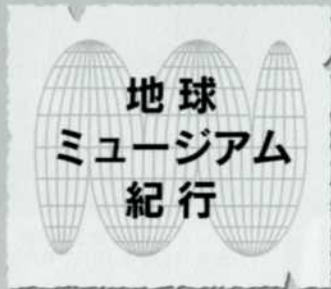


震災に立ち向かう心意気

三尾 稔 (みおみのる)

本館民族社会研究部



アイナ・マハル博物館／
インド

きたけれども。

運営責任者のジェティ氏は、あくまで前向きである。「ないものねだりをしては仕方ない。手に入る資金と材料でやるだけです」と笑う。昨年は政府から若干の補助をえて、二階の部分的復旧にやっと着手できた。もとの資材を生かし、費用の節約に工夫をこらして地元の職人たちが懸命に復旧作業をしていた。災害にくじけない心意気が印象に残る一方、所蔵品の保全や往時の魅力の復活にむけた復旧とその支援の必要性を強く感じ、次第である。

アイナ・マハル博物館入口部分。
責任者ジェティ氏が立っている(2003年)



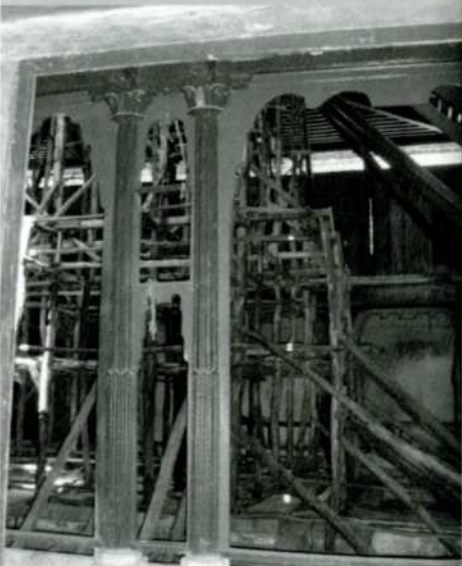
※上の写真2枚は金谷美和撮影



アイナ・マハルを裏側から俯瞰。
震災被害のあとが生々しい(2005年)



「ダイヤモンドの間」
の外壁。壁の装飾が
震災で剥落している
(2007年)



「噴水の間」の現状。崩落を防ぐため、
内側から棒で支えている(2007年)

3階部分の一部修復。柱や天井にはもとの資材を
活用している(2007年)



二〇〇一年一月二六日インド西端のカッチ地方を襲った大地震では、一万五〇〇〇人以上が死亡し、無数の家屋が破壊された。筆者は震災直後から何回かカッチを訪れ、この地方の古都プジを中心に復興過程を調査してきた。国際機関、政府、インド内外のNGOの活動により、震災から丸七年が経つ今日、居住エリアの復興はほぼ完了するところまできている。

しかし、プジの貴重な文化遺産のひとつ、旧王宮は復旧が大きく立ち遅れている。その一部を利用した博物館であるアイナ・マハルにも手ひどい被害の爪あとが残ったままで。

アイナ・マハルは一八世紀半ばの宮殿で、一九世紀創建の新宮殿とともにカッチの政治や文化の中心であった。インド独立後、王家が出資する財団の下でアイナ・マハルの二、三階部分が博物館となった。二階の入口ホール、王の寝室「ダイヤモンドの間」やその回廊、礼拝用の部屋、王が音楽を楽しんだ「噴水の間」、三階の「謁見

の間」などに、王家の調度品、衣服、楽器、写真や絵画が集められ、王族の生活の様子や王国時代の職人芸の粋が展示された。建物自体も魅力的だった。ヨーロッパで修業を積んだ職人が作ったタイルや鏡、回廊のヴェネツィア・ガラスのシャンテリアなど随所に見られるヨーロッパ趣味が、ヒンドゥーやイスラームの様式と融合して独特の雰囲気を出していた。つまりここは、植民地時代以前から既にインドで進んでいた三つの文化の混成の状況がわかる好例だったのである。